

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~

~play list~

titles / musicians / albums

Watermelon Man / MONGO SANTAMARIA / Watermelon Man

Watermelon Man / HERBIE HANCOCK / Takin' Off

Watusi '65 / RAY BARRETTO / Viva Watusi

El Watusi / RAY BARRETTO / Charanga Moderna

Bang! Bang! / JOE CUBA / Bang! Bang! Push! Push! Push!

I Like It Like That / PETE RODRIGUEZ / I Like It Like That

Richie's Jala Jala / RICHIE RAY / Jala Jala y Boogaloo

Subway Joe / JOE BATAAN / Subway Joe

Willie Whopper / WILLIE COLON / El Malo

Fever / LA LUPE / Reina De La Cancion Latina

Hang On Sloopy / ARSENIO RODRIGUEZ / Viva Arsenio

Bugalu / CHARLIE PALMIERI / Latin Bugalu

TP's Shing-A-Ling / TITO PUENTE / El Rey

Tighten Up / SONNY BRAVO / New York Latin Scene

You're No Good / HARVEY AVERNE / Viva Soul

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



Watermelon Man / MONGO SANTAMARIA / Watermelon Man
1922年キューバのハバナ生まれ、40年代末にニュー・ヨークへ渡り51~57年にかけてプエンテ楽団で活躍。その後カル・ジェイダー(vib)楽団に参加しリーダー・アルバムも発表。62年からは自己の楽団を率いた。その年の夏のある夜、ブロンクスのラテン・クラブに出演したときのこと…。レギュラー・ピアニストだったアルマンド・コリア(チック・コリア)の都合が悪かったため、サクソ／フルート奏者のパット・パトリックの友人でシカゴから来ていたハービー・ハンコックが代役をつとめていた。ハンコックはちょうどその年5月にブルーノートからデビュー・アルバム『テイキン・オフ』をリリースしたばかり。しかしその日は客の入りが悪かったため、次第にジャム・セッションのようになっていった。そこでハンコックが自らのナンバー「ウォーターメロン・マン」を始めるとやがて大いに盛り上がり、それ以来モンゴ

楽団のレパートリーとなる。リヴァーサイド・レーベルからリリースされた「ウォーターメロン・マン」は63年3月、ポップ・チャートでのトップ10ヒットを記録。ブーガルーの先駆けといえるナンバーだ。

HERBIE HANCOCK / Takin' Off



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



El Watusi /
RAY BARRETTO /
Charanga Moderna

Watusi '65 / RAY BARRETTO / Viva Watusi

1929年4月29日ニュー・ヨーク生まれのコンガ奏者。第二次世界大戦後、陸軍で旧西ドイツに駐留していたとき慰問に訪れたディジー・ガレスピーを見て音楽を志す。50年代後半にプエンテ楽団に参加し61年に独立し自己の楽団を結成。ラテンと並行して、数多くのジャズ・アルバムに参加していることでも知られる。通算3枚目(ティコ移籍第一弾)となる『チャランガ・モデルナ』から「エル・ワトゥシ」が全米17位の大ヒットを記録。当時はチャランガ楽団によるパチャンガが大ブームを巻き起こしていた時代だ。その後ブーガルー・ブーム直前の65年に「ワトゥシ'65」として再演(アルバム『ビバ・ワトゥシ』にも収録)。ピアノのパターンと手拍子、ラップ的ともいえる(?)しゃべり、そしてバイオリンとトランペットの単純な繰り返しのリフ・・・これがキモ！



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



Bang! Bang! / JOE CUBA / Bang! Bang! Push! Push! Push!

1931年エル・バリオ生まれ、野球選手をめざしていた高校時代に足を怪我して、その治療の間にコンガを独習したというジョークーバは、50年代、カル・ジェイダー・タイプの、ヴァイブをフィーチャーしたスモールコンボで活動開始。60年代初めにはジミー・サバテール(vo)を擁してスマッシュヒットを飛ばしていた。ブーガルー・ブームのきっかけとなった「El Pito」(65年)のヒットを受けて、「Bang! Bang!」「Push Push Push」「Sock It To Me」と立て続けに大ヒット。アルバム『Bang! Bang! Push! Push! Push!』は、マンボ、チャチャチャ、デスカルガと、ヴァラエティあふれる1枚だ。この曲自体は、バカバカしいほど他愛のない、ノリー発勝負！ 瞬間芸みたいなナンバー。

To be with you



Copyright: マンボラマTokyo

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



I Like It Like That / PETE RODRIGUEZ / I Like It Like That

66年に「Micaela」をヒットさせたピアニスト／バンドリーダー＝ピート・ロドリゲスが67年に放った代表作であり、ブーガルーを代表する1曲。ポップでキャッチーなサウンド、手拍子を使ったクッキリとしたビート、ときおり入る印象的なキメ、英語詞が特徴。アルバムのほかの曲では切れ味鋭いピアノ・プレイを聞かせているが、ここでは、延々とリフを繰り返す。94年に映画「I Like It」のテーマ曲としてブラックアウト・オールスターズ(ヴォーカル: テイト・ニエベス)がほぼ完全カバーしてリバイバル・ヒットした。ピート・ロドリゲスは70年、パナマから出てきたばかりのルベン・ブラデスを迎えてアルバムを発表したことで知られる。が、この作品はさほど話題にもならず、失意のルベンは、いったんパナマに帰ることになる。



Copyright: マンボラマTokyo

マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~

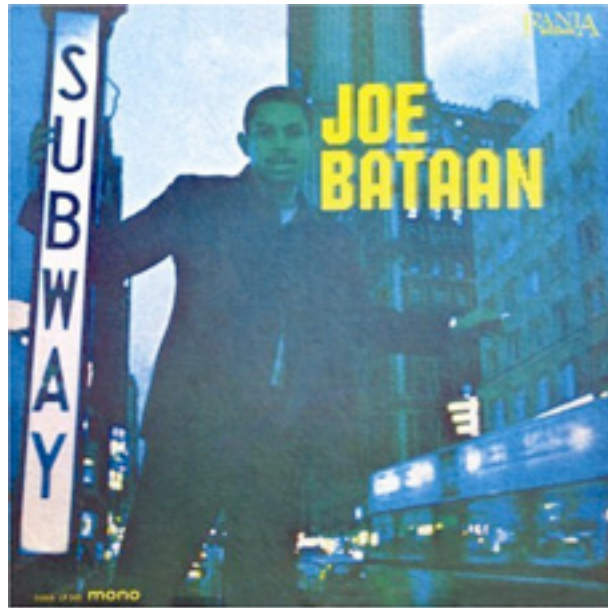


Richie's Jala Jala / RICHIE RAY / Jala Jala y Boogaloo

ジュリアード音楽院などでクラシックの教育も受けたリカルド・レイ(45年ブルックリン生まれ)のアグレッシブなピアノにボビー・クルース(37年プエルトリコ生まれ)の繊細にして豪胆な歌声が絶妙に絡み合うサルサ界最強のコンビ。最初の出会いは50年代後半、ボビーのバンドにリッチーがベーシストとして参加したときとか。64年に『Arrives / Comejen』でデビュー。ブーガルー・ブームと前後してプエルトリコから登場したハラ・ハラは、ボンバ+プレーナ+カリプソ+α...のニューリズムで、コミカルなダンスも特徴。エル・グラン・コンボほか、数々の楽団が取り上げている。この「リッチーズ・ハラ・ハラ」は67年に大ヒット。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



Subway Joe / JOE BATAAN / Subway Joe

42年、ニューヨークのエル・バリオでフィリピン人とアフロ・アメリカンの間に生まれたジョー・バターンは、本物のチンピラ生活のあとでピアノを独学し、ブーガルー・ブームの真っ只中に『ジプシー・ウーマン』(67年)でデビュー。2作目『サブウェイ・ジョー』からの、イナセなタイトル曲。スピード感あふれるトロンバング・サウンド、ドゥーフアップそのままのバックコーラス、ぐいぐいとリズムを引っ張っていく手拍子がカッコいい。のちに河村要助作詞によるS-KENヴァージョンも登場した。バターンは70年代初頭にファニアを離れてサルソウルの創設に関わり、その後のダンス・ミュージックの先駆けともなった重要人物。80年代以降、ほとんど音沙汰がなかったが2005年にアルバム『コール・マイ・ネーム』で突然復活、現在、活発に活動中である。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



Willie Whopper / WILLIE COLON / El Malo

1950年4月22日ブロンクス生まれ。ニューヨーク・サルサを象徴するトロンボーン奏者／バンド・リーダー／プロデューサー／アレンジャー／歌手。幼いころに祖母から子守唄として歌ってもらったプエルトリコの歌の数々が、音楽家としての彼の資質に大きく影響している。16歳でバンドを結成、17歳のとき、ジョニー・パチエーコの紹介でポンセから出てきたばかりの歌手エクトル・ラボーと知り合ってコンビを組み、67年、『エル・マロ(=ワル)』でデビュー。トロンバングを前面に押し出したニューヨークらしいサウンドで大きな注目を集める。“プエルトリコ人=ワル”というステレオタイプのイメージを逆手にとった巧みな戦略と、プエルトリコ(および汎カリビアン)音楽の要素をふんだんに取り込んだことで、ニューヨークのプエルトリコ人たちから圧倒的な支持を受ける。これぞまさに、サウス・ブロンクスのストリート・ソウルだ！



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~

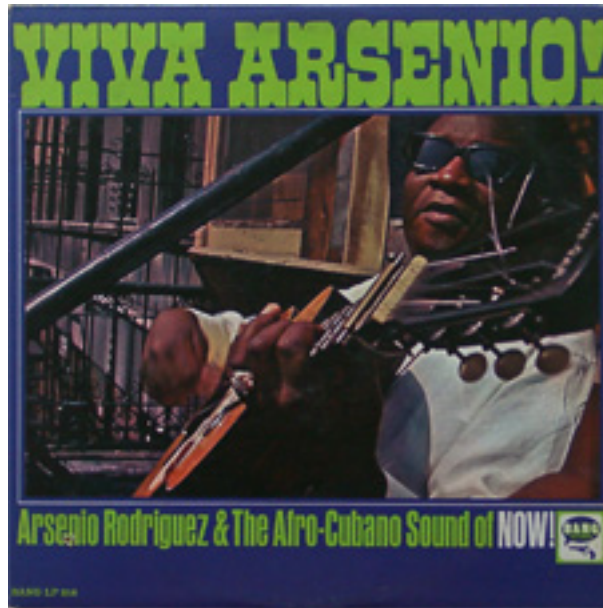


Fever / LA LUPE / Reina De La Cancion Latina

“クイーン・オヴ・ラテン・ソウル”の異名を持つキューバ生まれの女性歌手(アルバム・タイトルはまさにそこから!)。本名はグアダルーペ・ビクトリア・ジョリ。39年、サンティアゴ・デ・クーバの生まれで、本国でのキャリアは不明だが、62年ニューヨークに移り住み、モンゴ・サンタマリアと知り合って、63年にアルバム・デビュー(当時、モンゴは41歳、ラ・ルーペは23~4歳ということになる)。そもそも女性歌手が少ないラテン音楽界にあって、当時でいえばセリア・クルースがいたぐらい。セリアがアップ・テンポのグアグァンコーやグアラージャを得意としていたのに対して、ラ・ルーペはどちらかというと、コッテコテの濃厚な曲が得意で、荒々しさを内に秘めたむせ返るような情熱的な歌声で人気を博していた。言ってみれば、ロウ・ブロウぎりぎりの重たいパンチか。リトル・ウィリー・ジョン、56年のヒット曲のカバー。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



Hang On Sloopy / ARSENIO RODRIGUEZ / Viva Arsenio

1913年キューバのマタンサス生まれ。30年代から自己の楽団を率いて活躍し、ラテン音楽に数々の足跡を遺した偉大な音楽家。50年代以降、米国に移住し、多くのミュージシャンに多大な影響を与えた。

「Twist and Shout」の作曲者として知られるバート・バーンズが65年に設立したBANGレコーズにアルセニオが残した異色作『ビバ・アルセニオ』に収録、バーンズ作マッコイズのカバーがこれ。アルバムにはほかに「LaBamba」「Cielito Lindo」といったスタンダードと自作曲をあわせた全12曲。ファンキーなトレスが鳴り響きコクのある野太い声が響けばそこはもう完全にアルセニオの世界。



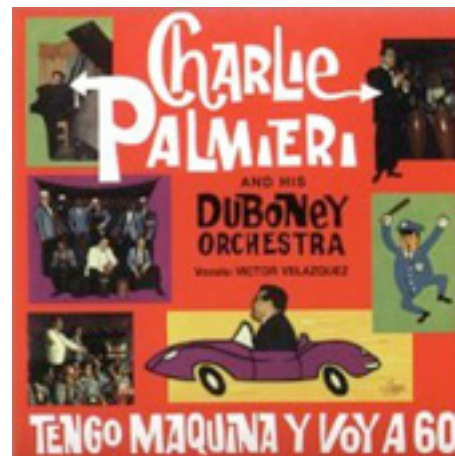
マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



TP's Shing-A-Ling /
TITO PUENTE /
El Rey

Bugalu / CHARLIE PALMIERI / Latin Bugalu

1927年NY生まれ、14歳でプロになり、マチート楽団、テイト・プエンテ楽団、テイト・ロドリゲス楽団などに参加。50年代末にチャランガ・ドウボネイを結成し人気を博し、60年代初頭にはアレグレ・オールスターズはじめさまざまなデスカルガセッションの中心人物として活躍した。9歳下の弟エディがデビューするとき“トロンバンガ”という名前をつけたのも彼だといわれる。ブーガルー・ブーム真っ只中の68年にチャーリーが放ったヒット・アルバムで、ソロが炸裂する「マンボ・ショウ」で幕を開け、「アップタイト」「ブガルー」と英語～スペイン語まじりで歌われるブーガルー、ラテン・ジャズ、ボレーロとヴァラエティ豊か。強烈なピアノがものすごい存在感を発揮する。ジャズとR&Bとラテンをミックス・・・NYラテンの本質はこれだ！という心意気がスペイン語「bugalu」にも表れている。



マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



Tighten Up / SONNY BRAVO / New York Latin Scene

1936年NY生まれ。のちにティピカ73やタイト・プエンテ楽団などで活躍するキューバ系ニュー Yorker=ソニー・ブラボの初リーダー作から。これもまさにブーガルー・ブーム真っ只中の68年リリース。音楽監督はルイ・ラミーレス、ベース転向前のポビー・バレンティンも参加(tp)している。リーダーが兵隊に取られているうちに1位になってしまったというイワク付き、アーチャー・ベル&ザ・ドレルズ、68年春の全米ナンバー・ワン・ヒットをすばやくカバーしている。後半部分になって、たまらずにラテンの本性が剥き出しになるところがカッコいいです。

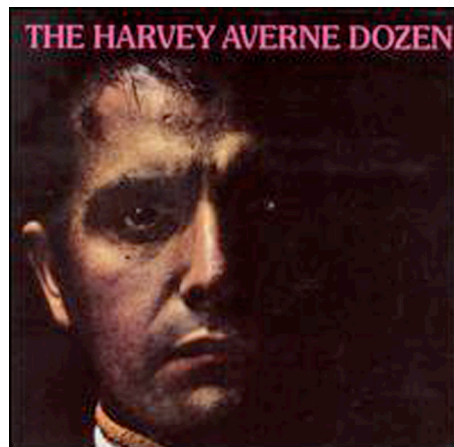


マンボラマTokyo presents 新宿ラテン地獄4 ~ブーガルー~



You're No Good / HARVEY AVERNE / Viva Soul

のちにココ・レコードを設立し数多くの傑作サルサ・アルバムを製作するハーヴェイ・アヴァーンはもともとピアニスト/ヴァイブ奏者で、60年前後にラテン・バンドを率いていたが解散、68年リリースの『ビバ・ソウル』では、英語詞とインストによるソウル・テイストたっぷりの演奏を聴かせる。それはブラックではなく白人的アプローチであり、ブーガルーというよりはプレ・ラテン・ロックか？アル・クーパーなどに非常に近いものを感じる。アレンジ＝マーティ・シェラー、レコーディング・ディレクター＝ジョニー・パチエコ、そしてプロデュースがアヴァーンとジェリー・マスッチ、というところが非常に興味深い。



Copyright: マンボラマTokyo

